

報告事項ケ

平成25年度第3回鳥取県教育審議会学校等教育分科会の概要について

平成25年度第3回鳥取県教育審議会学校等教育分科会の概要について、別紙のとおり報告します。

平成25年11月18日

鳥取県教育委員会教育長 横 濱 純 一

## 平成25年度第3回鳥取県教育審議会学校等教育分科会の概要について

平成25年11月18日  
高等学校課

- 1 日時 平成25年11月11日（月） 午後2時～4時
- 2 場所 鳥取県庁第二庁舎 第33会議室
- 3 参加者 別紙のとおり（委員：9名）
- 4 議事 次代を担う生徒を育成するための魅力と活力にあふれる本県高等学校教育の在り方について
  - ・来年度に予定している答申の項目の柱について、事務局の案を提示して意見を伺うとともに、個別の柱に関する審議を行った。

### 鳥取県教育審議会学校等教育分科会 審議(答申)項目(案)

- 1 グローバル化や情報化、少子高齢化がより一層進展するなど社会が大きく変化する中で、生きる力を育み、時代の要請に応じていく高等学校教育の在り方
  - (1) 先を見通すことが難しい予測できない局面を自らの力で切り拓いていく力を育てる高等学校教育の在り方
    - ア 生涯を通じて主体的に学び、考え続ける力を育てる方策
    - イ 他人を思いやる心などの豊かな人間性を育てる方策
    - ウ たくましく生きるための健康や体力を育てる方策
  - (2) 生徒一人ひとりの可能性を最大限に伸ばし、社会的に自立していく基盤となる生きる力を育む高等学校教育の在り方
    - ア 生徒一人ひとりの可能性を最大限に伸ばす方策
    - イ 社会的に自立していく基礎となる生きる力を育てる方策
- 2 県人口や生徒数の減少に対応した高等学校教育の在り方
  - (1) 生徒数減少の中で高い教育力を発揮できる高等学校のシステム作り
    - ア 鳥取県や地域を愛する生徒を育てる方策
    - イ 高等学校の適正な学校規模と配置
    - ウ 高い教育力を発揮できるための適正な学級定員
  - (2) 魅力と活力にあふれる高等学校教育の制度作り
    - ア 鳥取県が実現できる卓越性について
    - イ 普通科系学科と職業系学科の設置規模

## 5 委員からの主な意見

### <答申項目案の柱について>

#### 【1 (1)、(2)】

- ・先が見通せない、変化するのが当たり前の社会の中で、「(1) ア」に書いてあるように、常に学び続けるための基礎となる力を付けることが必要。また、高校では、学び方や学ぶことの意義をしっかりと教えていくことが必要。
- ・「(1) イウ及び(2) イ」については、家庭教育との関連性が高い。仕事に就くことの厳しさを子どもに教えていくために、家庭を巻き込んで対応していくことも大切。

- ・早い時期からキャリア教育を進め、生きる力を付けていくことが必要。
- ・「(2) ア」については、高校教育だけではなく、特別支援学校なども含めて、子どもを育てるときの大切な理念である。また、学校では、自己肯定感を育成することも必要。
- ・社会のニーズや生徒の興味関心が多様化する中で、後期中等教育も多様化すべきかという、そうではないと思う。むしろ多様化に対応するための資質、能力、経験を生徒に身につけさせていくことが必要。

## 【2 (1)、(2)】

- ・「(1) ア」について、保護者が子どもの将来に向けて、しっかりと育てる観点を持つことが必要となる。
- ・「(2) イ」に関連して、仕事を続けていく力を付けるには、専門高校で学ぶことが大切。中学校段階で自分の適性がわからなくても、高校で学んでいくうちにわかってくることもある。その意味でも、専門性を持った学科は残すべきと考える。
- ・少子化の中で、都市部の学校に生徒が集中している。地域の学校は、学校の特色や魅力を打ち出して、そこでしかできない教育をすべき。

## 【まとめ】

- ・答申の柱の案については、今回で決定ということではなく、今後の審議を踏まえて追加や修正をすることもあがるが、一先ずこれを案として承認することとしたい。

## <各答申項目案に対する主な意見について>

### 【1 (1)、(2)】

- ・高校は中等教育の後期の部分であり、高校単独ではなく、もう一度、中高一貫した教育を考えていくことも必要。
- ・小中一貫教育は各地域で取り組んでいるが、中高については大きなギャップがあり、連携は進んでいない状況。中等教育の充実のために、同じ目的意識を持って連携の取組を進めていく必要がある。
- ・社会が多様化するから高校も多様化するという考え方もあるが、現実的に、高校には多様な生徒が入学してきている。したがって、従来の一方通行の授業では通用しなくなっていることを自覚しなければならない。

### 【2 (1)、(2)】

- ・「(1) ア」は、必要なことであり、小中学校から一貫してきちんと教育していく必要がある。
- ・「(1) イ」について、従来は1学年4から8学級の規模が適正とされているが、生徒が減少している中でこの規模は難しいと思う。学校活動の活性化などを考えると最低4学級は必要だと思いが、それでは郡部から学校がなくなる。学校は地域との関わりが大きく、一緒に育っていかなければならない。例えば、どのような規模となっても学校を維持するとか、現在の4から8学級の適正規模は十分に検討する余地はあると思う。
- ・「(1) ウ」について、前回の答申では、生徒数の減少を好機と捉え、定員を減じていくとしている。小中学校は進んでいるが、高校はそうはなっていない。定員が変えられないのであれば、授業の展開の方法を工夫して、習熟度など少人数を生かした教育を進めていくことも考えられる。

- ・全国では、専門学科と普通科が混ざっている学校がある。それぞれの学科の生徒が互いに互いの良いところを学ぶことは非常に意義があること。鳥取工業高校にも普通科に近い理数工学学科があり、良い状況で推移している。
- ・県境を越えて、県外から生徒を受け入れることも考えていくことも大事。

### 鳥取県教育審議会学校等教育分科会 出席者一覧

区 分	氏 名	職 名	備考
鳥取県教育審議会 学校等教育分科会 委員	池 内 勝 彦	鳥取県高等学校PTA連合会長	
	石 操	日吉津村長	
	門 脇 由 己	米子北高等学校長	
	栢 木 隆 志	米子市立福米中学校長	
	小 枝 達 也	鳥取大学地域学部教授、附属小学校長	欠席
	高 橋 千 枝	鳥取大学地域学部地域教育学科准教授	欠席
	長 尾 志 保	鳥取県PTA協議会ブロック理事	
	松 本 清 治	県立倉吉西高等学校長	
	丸 山 智 子	県立倉吉養護学校長	
	森 田 清 子	北栄町北条こども園長	欠席
	矢 部 敏 昭	鳥取大学副学長	
	山 口 朝 子	鳥取市教育委員	
	山 本 正 人	鳥取市立若葉台小学校長	欠席